

愛されたい……側に、いて……っ

「――主よ、どうか私をお導きください」

朝一番の礼拝は、最も私の墮落を清めてくれる。幼い頃より抱く、どうしようもない渴望を諫めてくれる。

陽光を浴びた大理石の神像は、今日も神々しく見えた。

ここは、果ての教会と呼ばれている。

近くに町はあるが、馬車で一時間程はかかる辺鄙な場所で、務める者も年配の者が大半。固定の信者がいるわけではない。

その理由は、表だつては『戦没者の供養』だ。

この地はかつて、激しい戦の地であつた。それも、一度や二度ではない。

その魂を慰め、祈りを捧げる為の場所としてこの教会はある。

(割愛)

私は今、星の海にいる。上も、下も、見渡す限り広がる濃紺の世界と瞬く銀や金の煌めき。

その幻想的な世界には私と、もう一人の人しかない。

いや、人ではない。

背に真っ白い十二枚の羽根をつけ、白い滑らかな布地の服を纏う黒髪の人物は、ジッと私を見つめ、やがて近付いて微笑みを浮かべた。

『よかった、ようやく出会う事ができた』

「え?」

その微笑みは優しく、切れ長の金の瞳は慈しみを感じる。

呆然とする私の前に膝を折ったその人物は、当然のように手を差し伸べてきた。

『私の名はリヴィル。天より遣わされし者だ』

「天、から」

それは、天使を意味する。

神の代弁者にして御使い。天と地上を、繋ぐ者。

「っ! あっ、私は!」

『知っている、神父ハイネ。清く純粋な魂を持つ者よ。私は、ここにお前が来るのを待っていた』

その言葉は、私の心を大きく揺さぶった。

十二歳で教会に預けられてより、ずっと神に仕えてきた。日に三度の礼拝を欠かさず、人の為にあれという教えを胸に……でも、何故か上手くはゆかなかった。

私は出来損ないで、神は私を不要としたのだろう。この教会に送られてからずっと胸にあつた思い。

だが、そんな私の前に天使が降り立つたのだ。

気付けば泣いていた。胸を握り、見つめたまま、私は溢れるものを抑える事ができなかったのだ。

天使リヴィルは痛ましげに私を見つめ、大きな手で頬を撫でる。

その手はとても温かく、安心するものだった。

『苦しい旅だった。だが、それを経てこの地に辿り着いたお前は、神の目に留まったのだ』

「私が、神の目に?」

『ああ。神は今、未来を憂いている。信仰とは名ばかりの者が力を持ち、純粋な信仰を妨げている。この現状を、神は嘆いているのだ』

リヴィル様の言うことは、私も肌で感じた。元々は中央にいたのだ。

『故に、神は新たに神の言葉を下ろし、体現する者を探している』

その一言に、私はドキリとしてより強く胸元を握った。ドキドキと高鳴る音がする。今この瞬間、望外の幸せが舞い降りる。そ

んな予感に震えている。

だが、その浅はかさが伝わったのだろう。リヴィル様はこちらを見つめ、僅かに落胆の顔をした。

『それがお前だとは、言っていないぞ』

「あ……」

その言葉は……恐ろしく私を震わせる。

勝手な期待を抱くだなんて、なんて愚かな。強欲は罪なのに。違う意味で胸元を握った私の肩に、リヴィル様の大きな手が触れる。頼りなく見つめたその先で、美しい人は一つ確かに頷いた。

『だが、候補には入っている』

「え？」

『お前はまだ若い。故に未熟だ。これから修行を行い、心を育てよ。神を疑わず、神の言葉を素直に受け取り、従うのだ。その導きを、私が仰せつかったのだ』

修行すれば、私は神のお声を聞ける者となるのだろうか。

僅かに灯る喜びと期待に熱くなる体。ワクワクと心が躍るのが分かる。この思いを忘れなければ、きつと辛い修行であつても乗り越えられるだろう。

「天使リヴィル様、よろしくお願いします。神の試練を乗り越えられるよう、誠心誠意お勤めさせていただきます」

『よい心がけだ、神父ハイネ。では明日、教会の司祭に声をかけよ。あの者は神の敬虔なる信徒。特別な修行の場へとお前を導くだろう』

司祭……リニエ司祭様が？

ふと頭に過ぎった人物は、果ての教会を預かる上司だ。

普段はあまり口数も多くなく、決して愛想のいいタイプではない。だが、年長者でもあるのでそれとなくフォローはしてくれるが。

「分かりました」

『では明日、楽しみにしている』

そう言つて、リヴィル様はフツと姿を薄くし、キラキラとした粒子を残し消えてしまった。

そこで、私の夢も覚めてしまった。

(割愛)

『ハイネ、神の修行とは何か、分かるか？』

「え？ いいえ。とても、考えが及びません」

逞しい腕が私をしつかりと抱きしめている。熱くて、なんだか頭がぼんやりとした。優しいものに包まれているような心地に、私はうつとりと身を任せてしまう。

そんな私を、リヴィル様は撫でてくれた。

『肉体的なものではない。ただ、心を柔らかくするのだ』

「心を、ですか？」

『そうだ。神の声をその身に引き入れるには心が柔らかくなければ上手くゆかない。年端も行かぬ子供が奇跡を起こすのは、この柔軟な心があつてこそだ』

……確かに、そんな話もある。

神の声を聞いた幼子が、起こる災害を予見し多くの者を救った。なんて話は世界中である。

そうか、心が柔らかくなければならないのか。

『疑いの心を捨てよ。与えられるものを素直に、そのままに受け入れるのだ』

そう、柔らかな声がする。

リヴィル様の唇が頬に、そして唇に触れていく。くすぐったいような……心地よいような。ふわふわとした気持ちでそれを受け入れていると、不意にそこから熱く肉感的なものが入り込み、私

の舌を捕らえ、絡めていく。

「んう！」

舌の根元を吸い上げられると、知らず私はビクリと体を震わせた。じんわりと背骨が痺れ、力が抜けていくのだ。

「あつ、これはっ！ だめえ」

快楽は、禁欲を強いられる神父にとってあつてはならない欲望だ。

この身は決して清らかではない。欲望は溜まり、時に発散しなければ病となる。

それでも、可能な限り我慢せよというのが教会の教えだ。

そんな浅ましさを、神の化身たるリヴィル様に暴かれていく。そう感じると……体の芯の部分がビリビリした。

『いけない子だ、ハイネ。私の与えるものを素直に受け取らなければいけないんだよ。その練習をしているのだ』

「でも、肉欲は禁忌で」

『誰がそんな事を言った？ 神はそこまで非道ではない。健全な男であれば体が溜まるのは自然な事。むしろ生き物として正しいあり方だ。それを押さえつけ、禁忌とする事こそが歪みだ』

……そう、なのだろうか。

今までの己の行為を振り返ってみる。他の神父達も同じように、己を慰めていた。結婚もせず、ただ虚しく思えたあれは……穢れでは、なかったのか。

『穢れだと、思っていたのか？』

「え？」

……今、声に出ていただろうか。

疑問に思い見つめると、リヴィル様は金の瞳を細めて笑った。『私は神の使いだ。お前の心を読む事など造作も無い。だが、それにしてもお前の心は警戒しないな。少々心配になるほどの純真さだ』

「そう、なのですか？」

なんだか、恥ずかしい。まるで心の隅々まで覗かれているように思える。

心の奥底に沈めたもので、見られてしまいそう。

『隠すことは神に背くことだぞ、ハイネ』

「！」

不意に、少し冷たい声がする。恐れ、見上げた先にある瞳は私を見下ろしている。

不興を、買ったのか？ 私はこの美しい使いを、怒らせてしまったのか。

「あつ、お許しを」

震えながら、許しを乞う。その目から不安の涙が落ちて、リヴィル様は優しく唇で拭ってくれた。

『怒ったわけではない。だが、まだまだ修行が必要だな』

苦笑と、クシャリと頭を撫でる手は柔らかく私を許してくれる。未熟を、許してくれる。

『どうやら、お前は愛の受け取り方が下手なようだ。神が人に与える最も大きなものは愛情だ。それを、凝り固まった先入観で拒んでいる』

そう言いながら、リヴィル様は綺麗に微笑んだ。

頬に触れた手が、ゆっくりと私の体を滑る。首筋を、胸を、腹を……

『まずはその硬くなつた心を解そう。私が手ほどきをするから、お前はただ受け入れるだけでいい』

戸惑う私をベッドに横たえた人が雄々しい顔で見下ろす。その姿に、私は知らず心臓が高鳴っていた。

長く、だが男性的な手が私の衣服を乱していく。地下の冷たい空気が触れて驚いて竦む、その肌に熱い手の平が触れていく。体を、確かめるように。

『意外と鍛えているのだな』

「教会は何かと力仕事が多いですし、ここは特に年配の方が多いのでっ」

指先が、胸を撫でる。その僅かな感覚の違いに思わず息が詰まってしまった。

『案外、敏感かもしれないな』

低く笑う、その声はどこか生々しいようにも思えた。未知の事に、心が震える。本当にこれは正しいの？ そんな疑念が沸き起こる。

でも、リヴィル様が私の胸にしつかりと触れ、その頂きに唇を寄せた瞬間、私の中で何かがパチパチと爆ぜ、疑念は一瞬吹き飛んだ。

「んうう！」

感じた事のない場所から、突如ビリとした感覚が走って私は声を上げた。

リヴィル様は私の胸をとてども丁寧に舐める。周囲から舌先を尖らせ、絡めるように。

それはとても淫靡で……目が、離せない。平らだった胸が刺激され、舐められ、吸われ、その度に疼くような感覚が背に走り、私を戸惑わせる。

右の胸は今、リヴィル様の唾液で濡れて妖しく照り、ぷつくりと膨れて先がツンと尖っていた。

『なかなか上手じゃないか。初めてで、ここで気持ち良くなれるのだから』

「気持ち、よく？」

これは、気持ちいいという感覚なのだろうか。

戸惑う私の目を見つめ、リヴィル様は頷いた。

『肉体に感じる気持ちよさは様々ある。これも一つだ。背が、甘く痺れてくるだろう？』

「は、い」

『体の奥が疼き、黙ってられない』

「はい」

『頭の中が僅かに放心してしまう』

「はい」

全て、リヴィル様の仰る通りだった。

これが、気持ちいい……。私の知っているものとは違う。気持ちいいとは、春の木漏れ日の中でする日向ぼっこのようなもの。干した布団で眠る一時。

『それも確かに幸福だな。お前の幸せと気持ちよさはとても愛らしく、優しいものなのだ』

心を見られたのだろう。言われ、少し恥ずかしくなる。まるで子供のようにだ。

そのこめかみにキスをされる。指先にも、丁寧に一つずつ。

『何も恐れずともよい。これもまた気持ちいいという事だ。時に愛情は触れあつて確かめるだろう？ それと同じだ』

「ですが、私は男で……あ」

そう、だ。リヴィル様は天使。性のないものだ。見た目や声、手の感じが男らしく見えてしまうから勘違いしてしまった。

それを証明するように、リヴィル様は笑って自らの服を捲る。白い薄い衣服は簡単にはだけられ、逞しい太股が露わとなる。

だが確かに、そこに男性器はない。だからといって女性器もついてはいない。ツルンとしていた。

『恐れる必要はなくなっただろう？ 私は女性でも、男性でもない。ただお前に愛を教える者だ』

そう言つて笑つて、再び私の胸に吸い付く。さつきよりもずっと、感覚が鋭くなった。背が、痺れる。

「ああ！」

堪えきれず声を上げ、僅かに背を反らせて震える。私の体は知

らなかった刺激に悶え、逃れようと動いてしまう。

その体をリヴィル様は許さず、しっかりと抱えて引き戻し、更に深く私を愛してくださる。

指が、私の乳首を摘まみコリコリとこねる。それだけで腰が緩く動き、彼の立派な太股に擦れて更なる気持ちよさを生んでいる。息が深く吸えなくて、短く熱くなる。徐々に頭にも熱が溜まるのか、抑制はきかなくなってきた。

『腰も揺れている。気持ちいいのだろうか?』

『気持ち、いい?』

『そうだ。お前の体が求めている。腰がずっと揺れて、私に擦りつけているのだろ。生き物としての本能がそうさせている』

『あ……はした、ない』

『いいではないか。そうした姿も全て私に見せよ。その全てが愛らしい。素直なお前が、私は好きだ』

「っ!」

好き、と、言ってくれた。

それだけで、私の心は歓喜した。

自然と目から涙がこぼれ落ちていく。この、胸の奥が軋みながら跳ねる感覚は少し痛くて、でも嬉しい。

そんな私のどうしようもない様子を見て、リヴィル様は真剣な眼差しをして、私の目尻に唇を落とす。頭を撫で、体の全てで抱きしめて。

『生きにくい心だ。素直で柔らかいからこそ傷つく。なのに、今までお前を救ってくれる者はなかったのだな』

「あ……っ」

『美しいハイネ。私が愛そう。心まで全て委ねてしまえ。そうすれば、私が一切を引き受ける』

「っ!」

それはとても甘美で、誘惑的な言葉。私が、欲しかったもの。

触れる手に、私は頬を擦り寄せる。目を閉じて、縛るように。それに応えるように、リヴィル様は動いた。

手は私の体をなぞりながら下へとさがり、下肢で熱くなるものを柔らかに握り込んだ。

「んうう!」

自分の手でしているのとは違う感覚に体が跳ねる。その手は私よりも体温が高く、筋が張り、大きい。それがゆつくりと上下に擦れていく。一つずつ、確かめていく。

『カリに引っかけられると気持ちいいのか?』

『あつ、気持ち、いいっ』

認めてしまうと、そこに欲望が生まれる。もっと、触ってと。

それを読み取った人は笑う。何処か嬉しげに、目を光らせて。ゆつくりだった動きが徐々に速くなり、濡れた音がしている。

腰骨が甘く痺れるような感覚は痛いような、気持ちいいようなものを広げた。

『沢山溢れてくるな。随分我慢していたようだ』

「あぐ! あつ、やああ。出、るっ! だめえ!」

涙で顔を濡らす私は足を突っ張り腰を揺らしながら喜んでいる。ダメと口にしなから、もう体はこの言い知れぬものを欲している。

『これは快楽だ。ハイネ、今お前が悩み、苦しむそれは悪ではない。愛され、体も心も開けば自ずと沸き上がる感覚だ。受け入れろ』

「狂って、しまうつ!」

『くくっ、この程度でか? では、この後はもっと大変だ。もっと、狂おしい程の愛を用意しているというのに』

そんな……そんなに沢山のものを与えられたら。

「死ん、じゃうつ!」

リヴィル様は笑い、私のものを口にする。熱い口腔が、舌が絡まりながら抜かれ、手でも余すところなく刺激され、私は初めて

脳が溶けるような快楽に誘われて射精した。

体が、言うことをきかない。気怠くて、何も考えられないのに勝手に動いていく。

その間じゆうも、リヴィル様は私の穢れを払うように丁寧に清めてくれている。その温かく柔らかな舌の感触に、私は今日初めて性愛というものに溺れる心を知った。

『気持ち良かったか？』

「はい……こんなに、気持ちいいなんて」

呆けたまま、思うままに口を開くと、リヴィル様は柔らかに微笑み、私の額にキスをした。

『ハイン、可愛い子。お前にはちゃんと才能がある。愛に飢えるその心を満たしてやろう。その身が、神と繋がるように一つ、特別な印を残そう』

そう言っ、リヴィル様は私の腹……臍の辺りに手を置く。

直後、そこは僅かに焼き付くように熱くなり、ドクンと一つ脈打った。

見れば、とても小さな黒い痣のようなものが出来ていた。臍を囲う、ハート型のそれは神秘的なものに見えた。

『これが、神との繋がりだ。お前はもう神を下ろす器として修行を始めた身。私が、最後まで見守ろう』

「はい、リヴィル様……」

何だか眠い。そういえば、これは夢なのだろうか？ 夢と、現実の狭間？ 私は、夢の中で眠ろうとしているのか。

考えが纏まらないまま、ただ腹部に薄らと温もりを感じて、私は眠りについて。

(割愛)

その夢の中は、まさに春の木漏れ日だった。

心地よい草を踏む感じに、ポカポカと暖かな日差し。周囲は森で木々が高く、その中にぽっかりと開いた場所がある。

その、倒れた木に彼の人々が座っていた。

「リヴィル様？」

問いかけると、彼はこちらを見て立ち上がり、ゆっくりと近付いてくる。純白の羽を背に。

『今日は私から会いにきた。夢を渡ると色々制限があるが、これもまた悪くない』

近付いて、そつと頭を撫でながら微笑む人に、私は胸の高鳴りを感じる。これは……恋なのだろうか？

リヴィル様に促され、日差しの差し込む所へと誘われる。倒れた木に腰を下ろすと隣に座る人を、私は意識してしまふ。

それがあからさまだったのか、笑われた。

『ちらちらと気にするくらいなら、しっかりと見てはどうだ？』

「それは！ あ、の、恥ずかしくて」

言いながら顔が熱い。ちよつと緊張気味に肩に力も入ってしまった。

その肩に手が触れた。

『まったく、不思議なものだ。お前は神を下ろす者として、候補に選ばれただけ。ただそれだけのはずだったのに、初心で純粹で、見ていてこちらが心配になる』

「そんな！ これで、成人はしております」

『そういう問題ではないのだが』

呆れたように腕を組んだ人は軽やかに笑う。そして温かな視線で、頭を撫でる。

『故に、興味がわいている。ただ導くのではなく、ハインを知りたいと思ひ今日は来た』

「知りたい？」

心が読めるなら、何でも知っていそうなのに。

疑問を込めた視線にリヴィル様は僅かに眉を寄せる。拗ねた感じがした。

『私とて、読むものと読まないものがある。人間一人の心や記憶のすべてを読んでいるのは疲れるからな。だから、個人的なものは知らない』

「そうなのですね」

『それに、お前の口から聞きたいんだ。お前という人間が、どんなことを思い、好むのか』

真つ直ぐな目。そこに、嘘はないように思う。

「何を、話せばよいのでしょうか？」

『そうだな……では、好きな事は？』

その質問はなんだか……妙におかしくて笑った。だって、昨夜あんな事をしたのに、今は好みの話なんて。

『……笑うな』

「だって」

『……私だって、今更だと思っている。お前が何を好んでいようと、本来は関係がない。それは修行の内容に関わらないのだから』  
ほんの少し顔を赤くした人がジロリと睨む。なのに、今は何も怖くない。

笑っていると、不意に耳殻に指が触れた。ピクリと反応してしまい、そちらを見る。

そこには、真剣なりヴィル様がいた。

『だからこれは、私個人が知りたい事だ。ハイネ、答えてくれるか？』

ドキリと、心臓が一瞬強く鳴る。誠実さを感じる視線に、私はギュッと胸元を握って頷いた。

とはいえ、個人の好みをどうこう言える環境にはいなかった。親戚をたらい回しにされた時は、それこそ個人の物など持てなかったし、教会に入れば欲は捨てよだ。

……だがふと、思い出したものがある。それはまだ、両親が健在であった頃。

「……焼きたての、パンの匂いが好きです」

『匂い？』

意外だったのだろう。リヴィル様は目を丸くして疑問そうに問い返す。

それに、私は微笑んで頷いた。思い出すと胸の奥がふわりと優しくなる。そんな気持ちだ。

「両親と暮らしていた場所は、お世辞にも裕福な場所ではありませんでした。幸い農業が盛んで。私の家も、多くはありませんが小麦を作っておりました。ですので、その小麦を使って母が毎朝、パンを焼くのです。香ばしい香りがして、それで目覚める朝はすごく嬉しくて……家族三人、食卓を囲むのです」

思えば、なんて贅沢な時間だったのだろう。あの頃は、これが当たり前だと思っていたんだ。

少しだけ寂しくなつて小さくなる。その私の体を、リヴィル様は温めるように抱きしめてくれた。

「思えば、あの頃が一番幸せだったのだと思います。清貧ですが、空腹ではありませんでしたし、家もありました。子供らしく振る舞って嫌な顔をする人はいませんし、泣く事も、怒る事も許された。私はそれだけで、十分だったのです」

『もう、いい』

ギュッと腕に力を入れた人の、温かな体温を感じてほっとする。思えば、久しぶりに思い出した。多分、この方がいるから。一人ではないから、大丈夫なのだろう。

『神はお前に、どれほど辛く当たったのだろうか』

「それは……分かりません。何か、行いが悪かったのでしょうか。私は悪魔の子らしいので、嫌われてしまったのかもしれないね」

『お前が悪魔？』

驚いた顔をするリヴィル様に、私はかつて親族に言われた事を思い出して苦笑した。

「男を惑わせる淫魔だと言われました」

『お前ほど清らかな者はいない。魔界の者はどれも心が捻くれているからな』

「そうなのですね」

案外、間違っただけでいいなかったかもしれない。あの当時の私は両親を亡くし、心細くて、大人に縋った。それが、媚びているように見えたのかもしれない。

今は……諦めてしまったのだけれど。

『諦める必要はない』

「あつ、また」

『不可抗力だ。触れていると強い思いは流れてくる。ハイネ、諦める必要はない。これからは私が、お前を愛そう。今までの分も』

……この言葉を、どこまで信じていいのだろう。

不意に、怖くなるんだ。信じてしまつたら、裏切りが苦しい。何度も期待して、叶わずに傷ついた。それは嫌だ。

「リヴィル様は、天使様なのに誘惑なさいます。私は、怖いのに」

『悪魔みたいか？』

苦笑した人を、私は驚いて見る。その金の目は何処までも深く、真実は何も見つけられない。

怖い。けれど……今を、幸福と思う自分もいる。

「貴方は、天使様です」

『そうか』

それだけで、この会話は終わってしまった。

温かな腕の中で安らいだ気分になったせいか、徐々に眠気が押し寄せてきた。

胸に身を預ける私を抱き止め、頭を撫でる手の柔らかな様子を見つめたまま、私は最後に手を伸ばす。

その意味をリヴィル様は分かってくれて身を屈め、触れるだけのキスをくれた。

『ハイネ、明日はあの小部屋で会おう。お前に深く触れたい。これも満たされるが、違うものが疼く』

「はい、リヴィル様。お待ち申し上げます」

これが限界だった。

眠りに落ちた私は温かな気持ちのまま、朝までぐっすりと眠ったのだった。

(割愛)

「……私に、何か出来ることはありますか？」

気付けばそう、口にしていた。

続きは本編で